日本農業新聞　平成26年9月9日掲載

農業技術プリズム

環境保全型農業の一手法として、病害虫防除への天敵生物の活用があります。自然界には、農作物の害虫に対応する多様な土着天敵が存在するので、環境が整えば、効果的な害虫防除に利用できる可能性があります。そこでセンターでは、土着天敵のすみかとなる植物を圃場（ほじょう）の周辺に植栽し、温存・増殖することで、害虫の発生を抑制する研究に取り組んでいます。

土着天敵を有効活用

ヒメイワダレソウ植栽 すみかつくり温存・増殖

植栽する植物には、耐暑性、耐寒性、被覆性などに優れ、開花期間が5～10月と長期間にわたり土着天敵の温存・増殖に効果が期待できる多年生草本ヒメイワダレソウを選定しました＝写真。諫早湾干拓地の圃場周辺にヒメイワダレソウを植栽し、バレイショとキャベツの栽培期間を通して調査した結果、多くの種類の土着天敵が温存・増殖されることが分かりました。通常は害虫が多くなってから土着天敵が増え始めますが、試験圃場ではアブラムシ類の発生初期から天敵である寄生蜂類の増加が確認され、天敵の温存・増殖を目的とした植物の植栽は、実際に防除効果があると考えられます。

今後は、施設野菜、果樹、茶に調査範囲を広げ、天敵に優しい農薬などと組み合わせた、生産現場で実践しやすい防除体系の確立に取り組む計画です。

（県農林技術開発センター・陣野泰明）